

「地域の絆づくり・つなぎ役」として活躍

民生委員・児童委員編

私たちのまち下阪本も少子・高齢化が進み、家庭や地域社会におけるつながりが薄れてきています。そんな中、高齢者や障がいのある方、子育てや介護をしている方などが、周囲に相談できず孤立してしまうケースや必要な支援が受けられないケースがあります。そこで、「民生委員・児童委員」は地域の身近な相談相手として、生活上の様々な相談に応じ、行政をはじめ適切な支援やサービスへの「つなぎ役」、そして高齢者や障がい者世帯の見守り活動や安否確認の役割を担ってくださっています。

下阪本地区では、森本忠雄会長を中心に 15 名の「民生委員・児童委員」が活動されています。新型コロナウイルスの影響で中止せざるを得ない事業もありますが、下阪本学区での主な活動は次の通りです。

① 「ふれあい給食」

毎月第3水曜日に社会福祉協議会主催の「ふれあい給食事業」に日赤奉仕団の協力を得て給食の調理を実施。72 歳以上の自治会員で希望される独居の方約 40 名に配達して、健康相談や心配ごとなどについて会話をし、見守り活動の一助としている。

② 「おしゃべりサロン」

毎月第3月曜日に下阪本市民センターで交流の場を開設。約 30 名の高齢者がとにかかくよく笑い、楽しく会話できることを目的に、体操・唄・ゲームの他、折り紙・ヨシ笛・バンド演奏・交通安全教室も開催。

③ 「福祉のまちづくり講座」

社会福祉協議会の役員・福祉委員・民生委員が、学区内の5ヶ所の自治会館で高齢者対象の「出前講座」を開設。健康指導だけでなく、唄や体操、ゲームなどに興じ、笑いとおしゃべりの楽しいひと時の提供。

④ 「エンジェルサロン」

毎月第4火曜日に下阪本市民センターにて、下阪本公民館共催でひえいすこやか相談所の保健師さんによる乳児の体重測定や育児相談のサロンを開設。子育て中のお母さんが育児の悩みを共有したり、一息ついたりすることができる居場所づくりの提供。

⑤ 「地域の見守り、専門機関へのつなぎ役」

担当区域において、高齢者や障がい者のある方の安否確認や見守り、子どもたちへの声かけ。また、医療や介護の悩み、子育ての不安、失業や経済的困窮による生活上の様々な心配ごとへの相談。さらに、相談内容に応じて、必要な支援が受けられるよう、地域の専門機関とのつなぎ役となる。例えば、緊急通報システム設置手続きのお手伝い、寝具丸洗いサービス手続きのお手伝い、紙おむつサービスの受給券の配布、ネットワーク台帳への登録等。

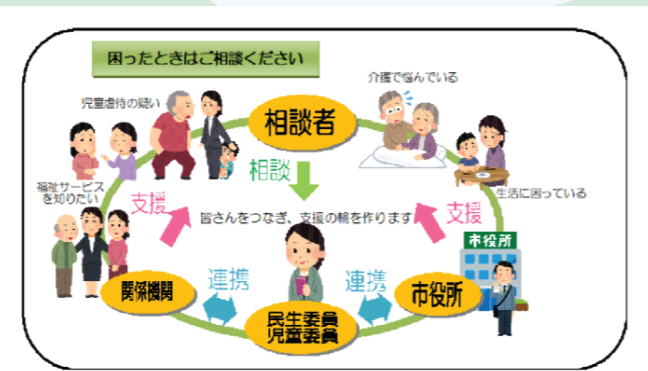
翻って、民生委員活動を取り巻く状況について、「民生委員の担い手不足」、「住民同士の顔が見えない」、「連帯感や地域への愛着に欠ける」など、様々な課題があると森本会長は指摘されています。



民生委員の認知度の低さが、活動を進める上で大きな支障になっています。しかしながら、まず住民に皆さんと顔なじみになって一步一步前向きに地道に努力し、まちづくりの仲間の一人として頑張っていかなければ、思っておられます。

なお、令和 11 月には民生委員の改選が行われます。退任希望の委員もいますので、是非、お手を挙げて下さい。【森本会長まで：090-1912-4116】

民生委員・児童委員とは
民生委員は、「民生委員法」に基づき、厚生大臣から、委嘱された非常勤の地方公務員です。また、児童委員も兼ねています。給料の支給はなく、ボランティアとして活躍。任期は3年（再任可）。



坂本城築城前後の下阪本は大賑わいだった

1、狂言『磁石』（下阪本の市場の風景）より

「おびただしゅう人がこぞっているが、何事じゃ知らぬ。ヤアヤア、坂本の市（下阪本の南大道・北大道が中心で、柳町から太間町にかけて、100 軒程並んでいたと言われていた）じゃというか。イヤ、これこそ承り及うだ市立ちじゃ。その上程も近うござるによって、これへは参って見物いたそう。[歩きだし] よい時分に通りかかって、珍しい市立ち見物いたすことござる。[一廻りして、中央で] イヤ、来るほどにはや市場じゃ。さてもさてもおびたしいことかな。あれからつとあれまで、[見渡して] 皆市場じゃ。ちと見物いたそう。（中略）



これは何じゃ、ハハア、子供もてあそび。びいびい風車、おきゃがり小法師（起き上がりこぼし）・振鼓（ふりづつみ）、土で作ったえの（犬）ころもあり、さてさてしょうかしい物じゃ。これは何じゃ。金襴（きんらん）・緞子（どんす）・緞錦（どんきん）・綾・錦、豹（ひょう）の皮・虎の皮、さてもさても、結構な物じゃ。茶の湯の道具。風炉・釜・茶碗・茶入・水さし・水こぼし。」

2、興福寺塔頭多間院英舜『多間院日記』（1570年）

「一山所々見物して坂本に下りる、山王廿一社拜見、社壇の結構目を驚かす。しかるといへども参詣の人も稀に、社人も社僧も見えず、神さび（荒）たる体（てい）なり、上坂本家々数多繁昌と見えたり。それより南に少津〔「少津」は三津の誤り？で、下阪本を指している〕の市場を見物、千五百家もこれあり」

当時、坂本・下阪本のまちは大層なにぎわいであったことが、狂言『磁石』、並びに『多間院日記』からうかがえます。それは、延暦寺の経済力が健在だったからであります。そして、戦乱の世でありましたが、京都につづく港が下阪本にあったからだと推察できます。琵琶湖の水運で運ばれてきた物資は下阪本で陸揚げされ、延暦寺や今道を通って京都に運ばれていました。

3、島津義久の弟、家久伊勢参宮道中記『中務大輔家久公御上京日記』（1575年）

「から崎の一松一見し、坂本の町に一宿し、五月雨の晴まほと有て、月隔なく（つきぐまなく：月の光がくまなく差し込む）湖水に移風時雨に、なと申あへり。処に、其うしろに船さし着、明智殿参会有へき由有り間罷出（まかす：貴所から退出する）、紹巴（じょうは）・行豊など同舟、其儘（そのまま）明智殿城を炬儀漕まはりみせられ候」

伊勢参宮のため京都に滞在していた島津家久は、連歌師里村紹巴に連れられて下阪本見物に出かけます。「坂本の町に一宿」とありますが、宿の後ろが琵琶湖であることから、下阪本に宿っていたのでしょう。柳町あたりではないかと思われます。そこへ、光秀が船で乗り付け、船遊びを楽しんでいます。坂本城が築城され、城下町となった下阪本は、以前にも増してにぎわいを取り戻していたのでは、と歴史博物館和田前副館長が話してくださいました。今回の情報提供は和田前副館長によるところが大であります。御礼申し上げます。



狂言『磁石』のあらすじ
遠江国見附の国府の者と名乗る男が、京の都へ奉公の旅に出ます。道中、熱田の森や琵琶湖を經由して、近江の坂本にさしかかると、にぎやかに市が開かれています。商店を見物して歩いているところへ、都の素っ破（詐欺師）が近付いてきて言葉巧みにだまして宿を紹介し、人商人（ひとあきんど：人買い）に売り付けようと企てますが・・・。
人買いとは人身売買を請け負う仲介人。そんな恐々とした時代背景が垣間見られる作品で、田舎者と都人の駆け引き、対峙が見所です。

